

病害虫発生予報 第6号(9月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

<予報の概要>

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稻	いもち病 紋枯病 白葉枯病 トビイロウンカ コブノメイガ イチモンジセセリ 斑点米カメムシ類	並 並 並 や や 少 並 並		ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	並 や や 少
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ チャノキイロアサミウマ	や や 少 や や 少 並
トマト、 ミニトマト	黄化葉巻病	や や 多	カキ	炭疽病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 や や 少 並 並 並
野菜全般	アブラムシ類 及びウイルス病 コナガ ハダニ類 ミナキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ	並 並 並 並 並	果樹全般	カメムシ類	や や 多

気象予報

1か月予報（予報期間 8月24日～9月23日 大阪管区气象台）

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

【気温】近畿地方	20	40	40
【降水量】近畿地方	20	40	40
【日照時間】近畿地方	40	30	30

凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (°C)	月降水量 (平年値) (mm)
9月	和歌山	24.7	和歌山 184
	潮岬	24.4	潮岬 305

I. 水 稲

1. いもち病(穂いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀南地域の早期水稲における8月中旬の葉いもちの発病株率は0% (平年0%)、穂いもちの発病株率は0% (平年8.0%)であった。
- ② 紀北・紀中地域の普通期水稲における8月中旬の葉いもちの発病株率は4.0% (平年9.6%)、穂いもちの発病株率は0% (平年0%)であった。
- ③ 一部のほ場で発生が散見されている。
- ④ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① いもち病に感受性が高い品種(「キヌヒカリ」等)の作付ほ場では今後の気象推移に注意する。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀南地域の早期水稲における8月中旬の紋枯病の発病株率は7.2% (平年6.4%)であった。
- ② 紀北・紀中地域の普通期水稲における8月中旬の紋枯病の発病株率は3.2% (平年6.8%)であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 上位葉への進展がみられるほ場では、薬剤防除を行う。
- ② 過繁茂ぎみのほ場では発生しやすいので、特に注意する。

3. 白葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の調査では発生が認められなかった(平年発病株率0%)。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発地や台風等で冠水したほ場では発生に注意し、発病を認めたら薬剤防除を行う。

4. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたり生息密度は、紀北地域の普通期水稲では1.5頭(平年0.3頭)、紀中地域の普通期水稲では0.1頭(平年0.4頭)、紀南地域の早期水稲では0頭(平年0.5頭)であった。
- ② 予察灯への8月1～4半旬の飛来数は、紀の川市2頭(平年3.6頭)、上富田町1頭(平年0.8頭)、那智勝浦町2頭(平年17.5頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場内におけるトビイロウンカの分布はばらつきが大きいので、ほ場全体の発生状況を的確に把握する。
- ② 成・幼虫が5頭以上生息している株を認めたら薬剤防除を実施する。
- ③ トビイロウンカは株元に生息するので、薬剤が株元に十分到達するように散布する。

5. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 8月上旬の25株あたり被害葉数は、紀北地域の普通期水稻では0葉（平成2.4葉）、紀中地域の普通期水稻では0葉（平成3.5葉）であった。

② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による8月1～3半旬の成虫誘殺数は、6頭（平成10.6頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 9月以降は被害葉率が高くても減収率は低い。また次世代幼虫の出現がないため、防除の必要はない。

6. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 8月上旬の25株あたりツトム数は、紀北地域の普通期水稻では0.2（平成0.2）、紀中地域の普通期水稻では0（平成0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 8月下旬～9月上旬に蛹化し9月中旬以降に成虫となるため、防除の必要はない。

7. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなど)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① すくい取り調査（捕虫網20回振り）による8月上旬の本田での発生ほ場率および平均成虫数は、紀北地域の普通期水稻で71%（平成60%）、3.4頭（平成4.8頭）、紀中地域の普通期水稻で67%（平成78%）、6.9頭（平成8.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 晩生品種では、乳熟期～糊熟期に薬剤を散布する。

II. 野菜・花き

<トマト、ミニトマト>

1. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培トマトおよびミニトマト（家庭菜園を含む）における8月4半旬の発生ほ場率は、0%（過去7年間の平均発生ほ場率9%）であった。

② 紀中地域の露地栽培トマトおよびミニトマトにおける8月3半旬の発生ほ場率は、80%（過去7年間の平均発生ほ場率28%）と平年に比べてやや多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原ウイルスの媒介虫であるタバココナジラミの徹底防除に努める。

② ハウス栽培では防虫ネット（目合い0.4mm以下）で開口部全てを被覆する。

③ 感染株は見つけしだい根元から抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋で密封して枯死させる。

④ 家庭菜園を含む露地栽培トマトについては、栽培終了後は速やかに全株を引き抜き、野積みにした上に古ビニルなどで2週間以上覆ってコナジラミ類を死滅させる。

- ⑤ 雑草はコナジラミ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類およびウイルス病（露地野菜全般）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平年8.5%）、寄生葉率は0%（平年0.7%）、ワタアブラムシの発生ほ場率は22%（平年13%）、寄生葉率は1.1%（平年2.4%）であった。
- ② アブラムシ類の黄色水盤（紀の川市）への8月1～4半旬の飛来数は、7頭（平年35頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① アブラムシ伝搬性のモザイク病には、アブラムシ類の防除対策としてシルバーマルチを行い、薬剤防除と併用する（「防除指針」参照）。
- ② ハクサイ等の育苗では防虫ネットで被覆して有翅虫の飛来を防ぐ。

2. コナガ（ダイコン、キャベツ、ハクサイ）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① フェロモントラップによる8月1～4半旬の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0頭）、和歌山市0頭（過去2年の平均0.5頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬のカンザワハダニの発生ほ場率は11%（平年26%）、寄生葉率は2.8%（平年4.2%）、ナミハダニの発生ほ場率は11%（平年11%）、寄生葉率は5.0%（平年1.8%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

4. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬の発生ほ場率は55%（平年52%）、寄生葉率は7.2%（平年20.2%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また防虫ネットで被覆し、成虫の飛び込みを防ぐ（「防除指針」参照）。

5. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬現在、発生が認められていない（平年発生ほ場率4%、寄生葉率0.2%）。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬の発生ほ場率は11%（平成11%）、寄生葉率は0.6%（平成0.9%）と平成並であった。
- ② フェロモントラップによる8月1～4半旬の誘殺数は、紀の川市42頭（平成64頭）、和歌山市50頭（過去2年の平均80頭）、御坊市90頭（平成267頭）、印南町1頭（平成71頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ふ化幼虫の集団が分散するまでの若齢幼虫期に防除するよう心がける。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

7. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる8月1～4半旬の誘殺数は、紀の川市5頭（平成15頭）、御坊市53頭（平成95頭）、印南町10頭（平成83頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢幼虫になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫対象の初期防除に努める。
- ② 抑制エンドウでは、は種後40～50日間寒冷紗または防虫ネットで被覆を行うと被害が軽減される（「防除指針」参照）。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発病量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）の8月5半旬の発生園率は36%（平成55%）、発病果率は6.1%（平成16.6%）、発病度は1.1（平成3.7）であった。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中下旬に防除できなかった園では、9月上旬に早急に防除を行う。
- ② 枯枝除去や剪定枝の処理を徹底する。
- ③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発病量 やや少 発生園数 並
夏秋梢発病量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）の8月5半旬の発生園率（春葉）は23%（平成28%）、発病葉率は0.3%（平成3.2%）、発病果率は0.7%（平成2.5%）であった。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 罹病性品種の場合、付傷すると果実発病のおそれがある。台風等で強風雨が予想される場合には、事前に銅水和剤（葉害軽減のための措置を講じる）を散布する。

② 夏秋梢の病斑は翌春の強力な伝染源となるので剪除に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）および慣行防除園の8月中旬における発生は認められなかった。
- ② 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）の8月5半旬の発生園率は19%（平成38%）と少なかった。寄生葉率は1.6%（平成11.0%）と低く、100葉あたり雌成虫数も3頭（平成39頭）と平成よりも少なかった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤は年2回以上使用しない。
- ② ミカンサビダニの発生にも注意し、本虫にも登録のある有効薬剤を選択する。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）の黄色粘着トラップにおける8月第4週の誘殺数は28頭（過去2年の平均20頭）であった。
- ② 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）の8月5半旬の果実における被害園率は38%（平成40%）、100果あたりの寄生虫数は0頭（平成0.5頭）と平成並であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬以降に有効な殺虫剤を散布していない園および夏秋梢の多い園では、9月の発生に注意する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における8月5半旬の「富有」の発病果率は0.0%（平成0.2%）、「刀根早生」・「平核無」の発病果率は0.0%（平成0.0%）と平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果実は剪除する。
- ② 夕立が続く場合は追加防除を行う。また、台風が接近する場合は事前に薬剤を散布し、できなかつた場合は台風通過後速やかに散布する。
- ③ 密植園で風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における8月5半旬の「富有」の発病葉率は9.6%（平成19.6%）、「刀根早生」・「平核無」の発病葉率は0.5%（平成2.9%）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布する。

- ② 盛夏期には病勢は一時休止するが、秋期になり気温が低下すると再び活発になるので、二次伝染防止に努める。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における8月5半旬の「富有」の発病葉率は0.0%（平年0.1%）、「刀根早生」・「平核無」の発病果率は0.0%（平年0.0%）と平年並であった。
- ② 前年秋期の発生状況から、円星落葉病の越冬量はやや多く、角斑落葉病の越冬量は平年並と考えられた。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は樹勢が低下すると発病が助長される。
- ② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における8月5半旬の「富有」の寄生果率は14.5%（平年17.1%）、「平核無」・「刀根早生」の寄生果率は1.5%（平年2.6%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼虫は主に果実とへたの間隙部に寄生しているので、薬液がこの部分にかかるように散布する。
- ② 薬剤が十分かかるように枝葉の混み合いをなくす。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における8月5半旬のカキの被害果率は、「富有」0.0%（平年5.7%）、「刀根早生」「平核無」0.0%（平年0.5%）であった。
- ② 紀の川市粉河の予察灯における8月上中旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、557頭（平年345頭）であった。
- ③ みなべ町の予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数は、8月3半旬346頭（過去3年の平均161頭）、4半旬910頭（過去3年の平均212頭）とやや多い状況が続いている。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。
- ② 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ 台風通過後、一時的に多くなることがあるので注意する。

本情報は、下記でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujoyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujoyouhou.html)

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。